

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	港区 港南3丁目 5-10
園名	まほうの保育園 港南芝浦

1 活動のテーマ

<テーマ>

ひかり

<テーマの設定理由>

日々の保育の中で、子どもたちが窓越しの太陽の光に手を伸ばしたり、影を追いかけたりする姿が見られた。その様子から、光に対する興味や不思議さを感じていることがわかり、「もっと見たい」「触ってみたい」という気持ちが育っているようだった。このような日常の姿から、「光」は子どもたちの探究心や表現力を育てるテーマとしてふさわしいと考えた。

2 活動スケジュール

全5回実地予定 (12/26・1/16・1/28・2/20・3/13)

・1回目：『“ひかり”を見て、感じる。』

水槽に水を入れ、窓越しに光を当てて、水面の反射や揺らぎを観察する

・2回目：『様々な“ひかり”を体験しよう。』

暗い部屋で、懐中電灯やデスクトップライトなど人工的なひかりを見つけ光を感じる

・3回目：『“ひかり”を使って遊んでみよう』

トレース台や懐中電灯、デスクトップライト、プロジェクターなどを使い、光で実際に遊んでみる。

・4回目：『“ひかり”を使って遊んでみよう』

3回目で使用したライトを様々なものに当て、影や光の屈折、反射などを楽しみながら光に触れる。

・5回目：『“ひかり”を使って遊んでみよう』

今までの活動をもとに自由に遊び、展開していく

3 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

●準備した素材・道具

水槽、机、カラーセロハン、ブルーシート、不織布（黒）、ライトボード、ライトボード観察用の台、プロジェクター、懐中電灯、デスクトップライト、センサーボトル、カップ、iPhone など、光の反射・屈折・影などを多角的に体験できる素材や道具を用意した。

●環境の設定

子どもたちが光の不思議さや美しさをじっくり感じ取れるよう、活動に応じて保育室の照明を調整し、暗い空間をつくるなどの工夫を行った。観察や遊びがしやすいよう、準備物は子どもの目線に合わせて配置し、実際に手に取って試せるようにした。また、コード類でつまづかないように配慮し、触れても安全な素材を選定。ライトボードや懐中電灯のコーナーを設け、子どもたちが自らの興味や発見をもとに自由に遊びを展開できるよう、開放的で安心できる空間づくりを心がけた。

4 探究活動の実践

<活動の内容>

「ひかりってなんだろう？」という問いから始まり、子どもたちは身の回りの光に注目し、懐中電灯やライトボード、太陽の光などを使って光を探し始めた。セロハンや水、手足に光を当てることで、色や素材によって見え方が変わること気づき、色の重なりにも興味を広げていった。

活動を重ねる中で、「光っているものって何がある？」という問いかけに対し、「宝石」「太陽」など自分なりのイメージを言葉にする姿も見られた。保育室を暗くし、光の変化をより感じられる環境を整えることで、光の通り方や反射の違いを楽しんでいた。

後半は、スタンドライトや懐中電灯、カラーセロハンを使った「光と影あそび」や、クリア積み木を使った光の探究へと発展。子どもたちは自由にコーナーを歩き来しながら、光を通したり反射させたりして、素材の違いや光の面白さに夢中になって遊び込んでいた。

そして、光を通して色の変化を感じたり、色の重なりを試したりする中で、子どもたちの興味は自然と「色そのもの」へと広がっていった。光あそびで培った気づきが、絵の具や色紙を使った色あそびへとつながり、光と色の関係を自分なりに確かめようとする姿も見られた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

活動を通して、子どもたちは「ひかりってなんだろう？」という問いに向き合いながら、身の回りの光を探し、さまざまな素材や環境に光を当てて観察することを楽しんでいた。「水に光を当ててみたい」「お部屋を暗くしてみよう」など、子どもたちのつぶやきや発想をもとに活動を展開し、光の当て方や見る角度による変化を発見していた。セロハンや画用紙、水などを使った観察では、「赤は見えるけど黒は見えない」「青は少しだけ光を通る」など、色や素材による光の通り方の違いに気づき、友だちと見せ合いながら発見を共有する姿が見られた。また、光を当てたときにできる影にも関心が高まり、「動かすと影も動く！」と影の形や動きに夢中になる様子もあった。

その後の活動では、光と影を使った遊びが広がり、懐中電灯やカラーセロハンを使って色の重なりや影の変化を楽しんだ。「赤と青を重ねたら紫になった！」「おばけみたい！」と歓声をあげながら、即興の影絵劇を始めるなど、想像力豊かに遊びを展開していた。

活動の後半には、クリア積み木やセンサーロボットなど新たな素材も加わり、子どもたちは光を通してできるカラフルな影や反射の美しさに目を輝かせていた。「赤になった！」「こっちは青だよ！」と友だちと発見を共有し合いながら、遊びを深めていった。保育者も子どもたちと一緒に活動に加わり、「どこに光を当ててみようか？」「色が混ざったらどうなるかな？」と声をかけながら、子どもたちの気づきや探究心を引き出す関わりを大切にしていた。そして、光を通して色の変化や色の重なりを体験する中で、子どもたちの興味は自然と「色そのもの」へと広がっていった。光あそびで得た気づきが、絵の具や色紙、クレヨンなどを使った色あそびへとつながり、光と色の関係を自分なりに確かめようとする姿も見られるようになっていった。



5 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

「ひかりとは？」という問いかけに対して、子どもたちからは「びかびかしているもの」「電気」などの答えが返ってきた。普段何気なく使っている言葉でも、いざ言葉にしようとする、その意味をどう表現すればよいのか迷う様子が見られた。改めて、“ひかり”という言葉が抽象的であること、そして子どもたち一人ひとりが異なるイメージや経験をもとに表現していることに気づかされた。

子どもたちのつぶやきや発見に耳を傾けながら、実際に“ひかり”を見たり、触れたり、感じたりできるような環境を整えることで、より深い学びや気づきにつながると感じた。今後日々の保育の中で子どもたちの言葉を丁寧に拾い上げながら、次の活動へとつなげていきたい。